



## 第48回 新型たばこと受動喫煙対策

## ▼新型たばこの登場

世界では、2つの系統の新型たばこが流行している。1つは、ニコチンを含んだ溶液を加熱吸引する電子たばこ、もう1つは、タバコの葉を加熱して吸引する加熱式たばこである。前者は、英米等の諸外国で流行しているが、わが国では、医薬品医療機器等法により医薬品ならびに医療機器としての承認を得ずに発売することが2010年に禁止されており、主に個人輸入の形で使用されている。後者は、大手たばこ会社によって製品が開発され、わが国において先行発売され、急速に流行している。現在3種類あるこの製品（アイコス、グロー、プルームテック）はたばこ製品として売られているが、たばこ会社は紙巻たばこに比べて有害化学物質を低減し、副流煙もほとんど発生しないと宣伝している。

アイコスおよびグローは、葉タバコを直接加熱し、ニコチンを含むエアロゾルを吸引する仕組みだが、プルームテックは、低温で霧化する有機溶剤からエアロゾルを発生させた後にタバコ粉末を通過させてタバコ成分を吸引するタイプで電子たばこに類似した仕組みである。規制の対象外としてほしいとの主張は吸引する有害成分の含有量が少ないとされる後者で強いようである。

## ▼使用の実態

2016年の世界の加熱式たばこの売上高で日本が96%を占めているという独特の環境にある。電子たばこの普及が世界の中で遅かった日本で、この新型たばこが流行した。多国籍たばこ企業は、これに気をよくして全世界で急速に販売を増やそうとしている。

日本での加熱式たばこの使用頻度調査（インターネット調査）：2015年、2017年に調査。15-69歳8,240人に調査。この30日間の加熱式たばこ使用の調査。アイコス使用者割合は、2015年0.3%、2016年0.6%、2017年3.6%であった。アイコス関連のテレビ番組をみた人がより使用者となっている（10.3% vs 2.7%）。

## ▼健康影響

フィリップモ里斯は、アイコスの有害成分量（国際公衆衛生機関が指定する9物質）は従来の紙巻たばこの90%減だと宣伝している。しかし、フィリップモ里斯社が言うほど、有害物質は少なくないとの報告もある。主流煙中のタバコ特異的ニトロソアミンは少なく、タールは少ない傾向だが、半減程度である。有害成分によってはアイコスの含有量が高いものもある。受動喫煙も0ではないようだ。受動喫煙の害も含めて人体への健康影響はまだはっきりわかっていない。新しい製品のため研究が不足しているからである。

## ▼加熱式たばこは禁煙に役立つか？

これもまだはっきりわかっていない。電子たばこは禁煙を促進するという研究結果がある一方、紙巻たばこ喫煙開始のきっかけになるリスクを懸念する意見もある。加熱式たばこに移行したが、紙巻たばこもやめられず2重使用になっている人もみられ、これでは禁煙の助けにならない。

## ▼加熱式たばこの喫煙規制のありかた

医療者としては、加熱式たばこを推奨すべきでないし、紙巻たばこからの変更を推奨すべきでもない。患者等が加熱式たばこに変えたことを報告しても、それは認めつつ、最終的な完全禁煙を目指すよう支援すべきである。したがって、喫煙規制においても紙巻たばこと同じ扱いをすればよい。閣議決定された改正健康増進法によると、加熱式たばこも原則屋内禁煙となるが、喫煙室での喫煙を可としている。加熱式たばこには、たばこのうち発生した煙が他人の健康を損なう恐れがあることが明らかでないとして厚生労働大臣が指定するものとの但し書きがあり、指定漏れになる製品がないか、厳しい監視が必要である。

加熱式たばこが吸えるのは、喫煙専用室か加熱式たばこ専用の喫煙室になる。いずれも室外への煙の流出防止措置を講じたもので、客・従業員ともに20歳未満の者が立ち入れないところとなる。事務所等および飲食店のうち新たに開設する又は経営規模の大きな店舗ではこれらの規制が適用される。経営規模は、資本金と面積で判断される（経営規模が小さいとは、資本金5千万以下、客席面積100m<sup>2</sup>以下）。事業所数の55%程度が小規模となると推定されている。



鳥取大学医学部  
環境予防医学分野  
教授

尾崎 米厚  
(おさき よねあつ)